
ヴァレンシア戦記～呪縛の螺旋・運命の剣～

NewWorld

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァレンシア戦記〜呪縛の螺旋・運命の剣〜

【Nコード】

N6913Z

【作者名】

NewWorld

【あらすじ】

かつて「不祥事」のために、所属していた騎士団を追放された「元帝国騎士見習い」の傭兵アルス・クライフォード。自然豊かな森の中で狩猟と採集をして暮らす一族「森の民」の少女リユーナ・クローゼス。大陸東部を支配する強大な国家に立ち向かう「反帝国組織のリーダー」銀狼グレイ・ハーバード。運命は彼らを巡り合わせ、やがて大陸東部全体を巻き込む戦乱の陰で暗躍する異形の者との戦いへと導いていく。

タイトルに戦記とありますが、モンスターや魔法じみた武器など

の要素も含むファンタジー小説です。

しばらく更新は不定期です。

流浪の傭兵（１）（前書き）

現在連載中の別小説「異世界人と銀の魔女」の更新を優先するため、こちらは可能なときに不定期更新する形となりますのでご容赦ください。なお、こちらは上記の小説と比べ、魔法などのファンタジー要素は低めとなっています。

流浪の傭兵（１）

やわらかな日差しが、森の枝葉を鮮やかに輝かせている。

初夏の陽光は、いずれは人々の肌を灼くほどに強くなることなど、微塵も感じさせない穏やかな顔を見せていた。

先日までの雨模様も嘘のように晴れ渡った空の下、森の生き物たちもつかの間の休息を存分に堪能しているであろう。

そんななか、少女は窮地に立たされていた。

「誰か助けて！」

少女の悲鳴は森の中に響き渡るが、彼女を追いつめるもののほか、その声を聞く者はいない。それも当然のことであった。

帝国とルクレールの国境に位置するバロックの森は広大無辺そのものであり、両国を行き来する旅人にしても、森の北と南にある交易路を使えば、わざわざこの森を通る必要はないのだ。

苔の生えた倒木。奇怪に捻じ曲がるようにして地面から露出する木の根。行く手をさえぎるように延びる木々の枝。方向感覚を失いかねないほど規則性もなく、乱立する木立。

そのどれもこれもが、旅人たちをこの森から遠ざける一因となっている。

彼女にとっては歩きなれた森であり、つまづくことはおろか、よろめくことすらせずに走り抜ける自信があった。しかし、追いつめられる精神的な恐怖から、普段ならつまづくはずのない場所で足を挫いてしまうと、彼女の足もとうとうその動きを止めた。

そしてついに、一本の木を背にしたまま、追跡者と対峙することになってしまう。

彼女の周りを取り囲む男たちは三人、いずれも盗賊のたぐいとしが見えない連中である。どの顔にも、ある種の期待を込めた下卑た笑いが浮かんでいた。

「いい加減観念したらどうだい。悪いようにはしねえからよお」

男たちの一人が刃の反り返った山賊刀をもてあそびながら言うてくる。

少女はぐつと齒を噛みしめると、男たちをにらみつけた。年の頃なら十七、八か。長めの黒髪を頭の後ろで軽く結い上げているのは、森の中でも動きやすいようにということだろう。やや幼さが残る顔立ちだが、瞳には強い意志の光を宿している。

「まさか、こんなへんぴな森の中でこれだけの上玉にありつけるとはな」

「まったく、ラッキーだぜ」

男たちは口々に言いながら、少女ににじり寄ってくる。

「どうしよう。どうしてこんなことに……」

さすがに少女も絶望的なつぶやきを漏らす。周囲を男たちに囲まれ、逃げ場はない。これから自分がどんな目に遭わされるのか、そんなことは男たちの目を見れば一目瞭然である。唯一の武器であったはずの弓矢も、逃げる途中でどこかに落としてしまった。

狩りの途中、知らない人間の気配がしたので、森に迷い込んだ人間でもいたのかと、親切心で近寄ったのが仇となった。

まともな職業の人間ではなさそうには見えていたが、最近はこのあたりに盗賊が出没することなくなったはずだと安心していた。結果、この有様である。彼女は自分の迂闊さに後悔したが、男たちはまたとない幸運に出会えたばかりに醜い喜びに満ちた顔で近づいてくる。

「近づかないで！」

「なあに、怖がることはねえ。一緒に楽しもうじゃねえか」

「なにもとって食おうってわけじゃねえんだぜ？」

どうやら男たちは、少しずつ追いつめ、こちらを十分におびえさせながら楽しむつもりのようなのだ。

はげ頭の男、背を丸めた小柄な男、体格は良いが腹の出た男。彼らは獲物を追い詰めた狼が舌なめずりをするかのように、にやにやと笑っている。

どれも腕の立つ人間には見えないが、非力な少女が武器も持たずにどうにかできるような相手でもない。

まさに状況は、絶望的だった。

「誰か助けて！」

少女はもう一度叫んだ。

「無駄だって。こんなところに誰もきやしねえよ」

と、その時である。

「物騒な世の中になったものだ。こんなところにまで盗賊が出没するとはな」

突然、横合いの茂みのなかから声がかかった。

黒い頭髮に手をつつこんで頭をかきながら、一人の青年が姿を現す。

いかにも気だるげな様子のその青年は、二十歳そこそこの若さに見える。それでいて奇妙に落ち着いた物腰をしていて、左腰に下げた長剣もしくりと彼の姿になじんでいる。丈夫そうな衣服の上に簡単な金属製の防具を身につけており、実戦慣れした傭兵を思わせた。

「お願い、助けて！」

少女はすかさず叫んだ。彼女にしてみれば、絶望的な状況における唯一の希望が目の前にあらわれたのである。まさに、藁にもすがる思いであった。そしてまた、盗賊たちもそれに気づいて、青年の方へと向き直る。

「何だ？ てめえは。死にたくなけりや、あっちへいつてろ！」

盗賊たちの一人がすごみをきかせて言い放ったが、青年はそれを無視する。

「助けてやらないこともないが、いくら出す？」

実に淡々とした口調であり、一瞬その場にいた誰もが、青年の言葉の意味を理解できなかった。啞然とした空気の中、真っ先に我に

返ったのは、声をかけられた当の少女である。

「ちょ、ちよっと！こんな状況で何言ってるのよ！」

「ただ働きはしない主義なんだ」

「わ、わかったわ！ お金ならいくらでも出すから、早く何とかして！」

ここへきて、さすがに啞然としていた盗賊たちも黙ってはいられなくなった。三人のうちの一人、小柄な男が山賊刀を青年に突きつけ、詰め寄っていく。

「てめえ、俺たちを無視すんじゃない！ だいたい一人で俺たち三人にかなうとも思ってるのかよ。ああ？」

「三人？ ……二人の間違いだろう？」

言うや否や、抜き打ちざまの剣閃が盗賊の肘のあたりを切り払っていた。その場にいた誰もが、一瞬、何が起こったのかわからないほどの早業だった。

「うぎゃあ！」

一撃で肘の腱と神経を切断されたその男は、腕を押さえてうずくまった。

よほど運がよくない限り、二度と元通りには動かせなくなるほどの深手である。

青年はうめくその男を横目に、残る二人と対峙した。この時点で三対一が二対一になったわけであるが、依然として不利であることに

は違いない。そもそも一人で複数を相手に勝つには大きな実力差がなければならぬ。

しかし、この青年には恐怖や不安の色など影も形も見えなかった。相変わらず落ち着いた物腰のままであり、これから命のやりとりをするのだという気負いすら見受けられない。己の腕によほどの自信があるのか、はたまた死を恐れていないのか。

「く、よくもやってくれやがったな！」

「ぶっ殺してやる！」

二人の盗賊たちは、一瞬の驚愕から立ち直ると、手にした武器を構えた。

さすがに荒事に携わっていることだけあって、彼らにもそれなりの戦闘経験はあるらしい。じりじりと間合いを測るよう青年との距離をつめていく。

しかし、当の青年は、さして関心もなさげに目を細めるのみだ。一応武器こそ構えてはいるものの、なにかもがどうでもいい、そんな投げやりな印象すら受ける。

「ち、畜生、なめやがって！」

「覚悟しやがれ！」

残る二人は青年の態度に怒ると同時に不気味さを感じ、それを振り払うように威嚇の声をあげながら一気に斬りかかった。

——交錯は、ほんの一瞬のこと。

青年は、身体を揺らすような緩慢な動きから一転して加速する。鮮やかな身のこなしで二人のうち片方の側面に回りこむと、敵の姿を見失ってうろたえる男の首筋を切り払った。そのまま倒した相手の身体をもう一人に向けて蹴り飛ばす。続いて青年は、かがみこむように身を深く沈めていた。ぶつかられて体勢を崩すその盗賊は、仲間の身体に遮られて彼の姿を見失う。その隙について青年の剣は、鋭くその胸元へと吸い込まれていく。

——声もなく絶命する二人の盗賊。

二人の人間の命を奪ったことに何の感慨も覚えないのか、特に表情を変えぬまま、青年は肘を切られてうずくまったままの男の方へと歩み寄る。

しかし、すでにその男は戦意を喪失していた。

「ひ、ひい！殺さないでくれ！」

男はガクガクと膝を震わせながらもどうにか立ち上がり、腕を抱えたまま大慌てで逃げていく。

その姿を見送り、青年は軽いため息をついたようだった。その表情からすれば、それは安堵からものには見えない。何か別の不満があるかのようなため息である。

助けられた少女の方はいえ、目の前で剣の血を拭う青年の姿を呆然と見つめていた。

助けてもらったことはともかくとして、よもやこんな凄惨な光景が繰り広げられようとは思いつかなかった。ましてや、当の青年は人を殺した後だというのに、いたって平然としているのである。きれいに整った顔立ちの青年ではあるが、外見だけで判断できないものを持っているようであった。

そして、なにより心配なこともある。

「あの、助けてくれて、ありがとう。実はその、言いづらいんだけど……」

「ああ、金のことなら気にしないでいい」

青年はあっさりそう言うと、こちらに背を向けて歩き出した。

「ま、待って！」

少女は思わず青年を呼び止めた。金が目当てでないのなら、何の見返りも求めずに自分のために命をかけてくれたことになる。いかに素性のしれない青年とはいえ、このまま行かせてしまうことなど少女の性格からいって、できなかった。

「でも、助けてもらったんだもの、何かお礼をしなくちゃ……」

「構わないと言ってるだろう」

「で、でも！」

少女がなおも言いつのると、青年は少し困ったような顔をした。そうすると、先ほどまでとは違ってかわった若者らしい表情になる。

「こちらが必要ないと言っているんだ。それでいいじゃないか」

「駄目！　だってあなただって、危険な目にあっただじゃない。なに何もお礼ができないなんて……そんなのないわ」

青年は、あきれたような顔になった。

「つまり俺は、君ができそうなお礼を考えなくてはならないわけか？」

「え？ いや、えっと……」

今度は少女の方が困った顔になった。青年は軽く苦笑すると口を開いた。

「……そうだな。このところ、ろくなものを食べてない。何か食料を持ってないか？」

すると、少女はにっこり微笑んだ。

「それなら、家でご馳走するからついてきて！」

「いや、そこまでしてもらう必要は……」

「ろくなものを食べてないんでしょ？ 栄養はちゃんととらなきゃ駄目なのよ？」

少女は、子供に言い聞かせるような口調でにっこりと笑う。

「……」

そのまま少女は歩き出し、青年も少しためらったあと、仕方なくその後についていこうとする。が、突然少女が突然立ち止まる。

「そう言えば、あなたの名前を聞いてなかった。私はリユーナ。リユーナ・クローゼスよ」

「俺はアルス。……アルス・クライフォードだ」

名乗るとき、彼はわずかにためらいを見せた。そのことにリユーナも気づきはしたが、特に気にも留めない。ゆっくり手を差し出して、握手を求めた。

「よろしく。アルス」

ヴァレンシア帝国。大陸暦一〇〇三年の現在では、ケルソネソス大陸東部でも随一の大国であり、東部域中央部で他の国家群を東西に二分するような形をとっている。

かつてこの東部域においてもっとも強大な国家は、現在の帝国とバロックの森を挟んで西に国境を接するルクレール王国であった。

しかし、二十四年前、当時は一小国に過ぎなかった帝国に、一人の英雄が皇帝として即位したことから、状況は一変した。

彼はたぐいまれなる軍事的才能でもって周辺諸国を侵略し、その巧みな政略は何度となく築かれようとしていた反帝国同盟を瓦解させ、ついには一代にして未曾有の大帝国を出現させるにいたったのである。

彼はまた、国力の増大のために貿易にも力を注ぎ、帝国の北部と南部にそれぞれ一つずつ東西を結ぶ交易路を整備し、大陸東部全体の活性化にも多大な貢献を果たした。

帝都であるストラウムもまた、北の交易路沿いに位置する重要な

交易拠点としての繁栄を誇っており、活気に満ちあふれた東部一の大都市といえる。

その帝都の中央に位置するストラウム城は、堅固な城壁に囲まれた難攻不落の名城として名高い。

そして今、その城の謁見の間へと続く廊下を一人の男が歩いていった。均整のとれた肉体に一分の隙もない足取り。その身にまとうのは、高級軍人しか身につけることの許されない立派な模様の入った正式軍装であり、腰に下げられた剣も実用と儀式典用を兼ねることにすらできそうな一品ものである。

黒い頭髪に同じ色をした鋭い眼光、きれいに切りそろえられた口髭を持った騎士。これだけの特徴を並べ立てれば帝国の、いや東部の誰もが連想する名前は一つだろう。

石造りの廊下には赤い絨毯が敷かれているが、男の規則正しい足音はこつこつとあたりに響く。

皇城で働く使用人たち、兵士たちが彼のそばを通り過ぎるたびに頭を下げて敬意を示してくる。無論、彼らの身分からすれば大概の貴族、軍人に対しては同様の振る舞いをするのは当然だろう。

しかし、男に会釈する彼らの表情は、憧れの有名人に期せずして遭遇してしまった興奮のようなものを感じさせる。

謁見の間の入り口まで着いたとき、彼の姿を認めた衛兵たちはうやうやしく一礼すると、尊敬の念を込めたまなざしで彼の後ろ姿を見送った。

謁見の間の玉座には、一人の男が座っている。他者を圧さずにはいられない、威厳と覇気を身にまとうこの男こそ、帝国皇帝にして大陸の覇者、ガールランド・ヴァレンタインその人である。

灰色がかった頭髪と深みのあるブルーの瞳。だが、とても齢五十

に手が届いているとは思えないほどのエネルギーを感じさせる。

「バロウか。まさか、帝都に向かってきていたとはな。入れ違いでヴァイスブルグに早馬を出してしまったところだ」

その声は、謁見の間に重く響く。

「陛下におかれましては、ご健勝のご様子で何よりです」

バロウと呼ばれた騎士は、そう言って一礼した。彼は自らが騎士団長を務める第二騎士団の騎士団領であるヴァイスブルグから離れ、ちょうどこのストラウムに出向してきていた。

この帝国には皇帝直属の騎士団が五つある。かつては騎士団のある地名でもって呼ばれていたのだが、度重なる領土の拡張とそれに伴う騎士団の移転のために、第一、第二という単純な名称が使用されることとなったのである。

五人の騎士団長はそれぞれが英雄と呼ばれるにふさわしい実力と名声を保持していたが、その中でも第二騎士団長バロウ・クライフオードは、とりわけ平民や騎士たちにとっての憧れの的である。

類稀なる剣の達人であり、その腕だけで、ただの平民から栄えある帝国の騎士団長の地位にまでのぼりつめた「大陸最強の騎士」。いまだ、四十四歳にして、その腕前にはいささかの衰えすら見えていない。

「今回の召集に関しては、他でもない。近いうちにルクレールへの攻撃を開始しようと思つてのことだ。詳細については軍議の中で決めていくつもりだが、今度の攻撃はこれまでにない大規模な、そし

て最後のものになるだろう。承知しておいてもらいたい」

いたって平然とした皇帝の言葉に、バロウの顔色がわずかに変わる。

「陛下。恐れながら申し上げます。ルクレールへの攻撃、時期尚早ではございませんでしょうか」

バロウは大胆にも皇帝に苦言を呈した。君主に対する反論は、時として命取りになりかねないものである。ガーランドはそうした点に厳しい君主ではないが、それでも生半可な度胸でできることではない。

「先の戦いから三年以上になる。時期尚早と言うこともあるまい」

皇帝は気分を害した様子もなく、そう言った。

「し、しかし……」

バロウはなおも言いつのろうとしたが、皇帝がそれを遮った。

「おまえが言いたいことはわかっていて。国内の貴族のことならば手を打っておく」

皇帝は、はつきりした口調で断言する。実際、バロウが危惧しているのも、長く続く戦乱に飽いた領主貴族たちが不満を募らせているからなのである。

「そうですか。……差し出がましい口を利き、申し訳ございません」

「構わん。ルクレールさえ陥落すれば、東部統一は目前となる。三年前の戦は、きっかけがきっかけなうえに準備不足の状態が始まったものであったからな、中途半端に終わってしまったが……。今回は十分な準備を整えて行く。お前たち騎士団長の働きにも期待させてもらおう」

「はっ……。微力を尽くさせていただきます」

「そうそう、三年と言えば、おまえの息子のことだ。——あれからもう三年になる。ほとぼりも冷めたであろうし、呼び戻したらどうだ？」

「……それが陛下の御意なれば」

バロウは息子の話題となると、極端に口数が少なくなる。それが騎士団で不祥事を起こした息子へのあきらめの気持ちからなのか、それとも父親である自分が余計なかばいい立てをするのは立場上よくないと考えてのことなのか。

「まあ、よい。今度の戦については他の騎士団長も交えて細部にわたる検討を行いたい。早馬を出しておいたから、全員が集まるまでは待機していてくれ」

バロウは皇帝の言葉にかしこまりましたと一礼すると、謁見の間を退出した。

流浪の傭兵（2）

リユーナと名乗った少女の後ろを歩いていく道すがら、アルスは彼女の様子をそれとなく観察していた。

律動的で活発さを感じさせる足取り。後ろで束ねられた黒髪がまるで動物の尾のように揺れている。遠い昔に自分が失ってしまった、生きるための活力とでもいうべきものを豊富に備え持っているような少女。

しかし、それよりも気になったのは、彼女の素性である。ここは交易路からはずいぶん離れた森の中だ。こんな年頃の少女がいるには不似合いな場所といえる。

ただ、彼女の着ているものは、森の中での活動に適した動きやすく丈夫そうな衣服である。弓こそ手にしてはいないものの、矢筒を背負い、弦を引く指を保護するための装具をつけている姿からすれば、まさに狩人そのものといった出立ちだ。

アルスには、思い当たるところがあった。

「ひょっとして、君は『森の民』なんじゃないのか？」

「え？ ああ、外の人にはわたしたちのことをそう呼ぶみたいね」

アルスの問いかけに、リユーナはあっさり答えた。

しかし、これですますアルスの抱く疑問は深まってしまった。『森の民』とは本来、森の中で暮らす一族を指す名称だが、彼らの生活は総じて貧しいものだったはずだ。

彼らは、領主貴族のもとで様々な封建的束縛を受けて暮らす農民たちとは異なり、農作物の納税などの義務を負っているわけではない。そのかわり、彼らはいっさいの人間としての権利を認められておらず、ただ森の材木を切り出し、それを領主の元に運び込むことでかろうじてその土地に住むことが許されているだけなのである。

対外的な商売のたぐいも認められず、彼らが生きる糧となるのは森でとれる獣や木の実、それにわずかばかりの畑でとれる収穫物だけという有様である以上、よそ者を集落に案内するほど友好的でもなければ、食料を分け与えてやるほど裕福でもないはずなのだ。

ところが、目の前の少女には、いじけたところが少しもなく、貧しい生活を送ってきているようにも見えない。それどころか下手な農民などよりも、よほど教養があるようにすら見える。

「アルス。なに、ばーっとしてるのよ？　ここが私の村よ」

リユーナの声に考えごとを中断させられたアルスは、彼女の示す方に視線を向けた。なるほど、確かに人の住む集落がある。その外観もおおむねアルスの想像どおりだ。

つまり、森の中を切り拓いて広場を設け、その広場を囲むように十数件の家々が立ち並んでいる、といった風景である。

しかし、意外にも本来なら村人同士が交流する場となるはずの広場の中心に、二階建ての大きな屋敷が建てられている。

リユーナはアルスについてくるよう促すと、立ち並ぶ家の一つへと歩いていく。どの家にも周囲に小さな畑がある。しかし、これではたいした収穫は望めまい。

数人の村人達が外に出ており、畑や井戸で作業をしているようだったが、リユーナの姿を見かけると、気さくに声をかけてくる。

アルスのことに気付いた村人の問いに、リユーナが事情を話すと、なにやら複雑そうな顔をしていたが、早く父親のところに行ってやりなさいと氣遣わしげな様子を見せた。

やはり、よそから人間とみなされないような扱いを受けることが多いためか、村人同士の連帯感や仲間意識は強いようだ。そして、その中でもリユーナは特に大事にされている——そんな印象を受けた。

やがて、目的の家の前までつくと、リユーナは勢いよく扉を開けた。

「お帰り。今日は何を獲ってきた？」

中から男の声がする。声の主は四十歳ほどの男性であつた。

「ただいま、お父さん。今日は色々あつて狩りどころじゃなかったの」

そう言つてリユーナは中へと入っていく。アルスがどうしたものかと戸口のところまで立ちつくしていると、リユーナの父はそれに氣づいたらしく、げんなりした顔をした。

「失礼ですが、どちらさまでしょうか」

言葉遣いといい、態度といい、まったくそれまでアルスが抱いていた『森の民』の印象とはかけ離れた品のある人物のようだ。そこへすかさずリユーナが割つて入る。

「このひとはアルス・クライフォードさん。森で盗賊に襲われそう

「なったわたしを助けてくれたひとよ」

「お、襲われた？ いったいどういうことなんだ！」

突然、リユーナの父は血相を変えて叫んだ。

「やあねえ。そんな大げさに考えないでよ。幸い何事もなく無事で済んだんだから」

リユーナがあきれたように笑った。いかにも仲の良さそうな親子である。アルスは思わず、胸に小さな痛みを覚えた。よほどに娘のことを溺愛しているのだろう、リユーナの父はまだ顔を青ざめさせている。

——自分の父は、どうだろうか。自分のことを今もなお、心配してくれているのだろうか。しかし、自分は心配してもらうに値しない人間なのだ……。そんなことが胸をかすめたためか、アルスはリユーナの父がつぶやいた言葉を聞き逃していた。

「どういうことなんだ。話が違う……」

「え？ なんのこと？」

代わりにリユーナが聞き返すも、男性は軽く頭を振った。

「い、いや何でもなし。それより無事でよかった。アルス殿にも礼をいわねばならんな。——申し遅れましたが、私はジム・クローゼス。この娘の父です。今日は娘を助けていただいたそうで、本当にありがとうございます」

「いえ、たいしたことではありません。お気づかいなく」

丁重に礼を言うジムに言葉を返ししながら、アルスは家の中を見回してみた。

木のテーブルに木の棚など、ほとんどがこの森でとれる木材を使って作られた家具だ。ただ、そうした調度品のなかには、この家に似つかわしくないような高価なものも混じっているようである。

「これから、アルスにお礼のごちそうをしようと思っているんだけど……」

「それはいい。だが、これからどうしても外せない来客があつてね。屋敷の方を使ってくれないか。少し遅れて私も行くから」

「うん。わかった」

うなずくと、リユーナはアルスを伴って家を出た。

「屋敷つてあの村の中心にあるやつのことか？」

「ええ、そうよ。いつもは村に大事なお客さんが来たときとかに使つてるの」

リユーナの言葉に、アルスは首をかしげた。

『森の民』は外部の人間とは、一部の物々交換を別にしてほとんど接触を持たないはずである。客が来るとは、それもリユーナの口ぶりからすれば、しばしば訪れているとはどういうことか。

「ここは普通の『森の民』の村とは違うのだろうか？」

それとも、そもそもアルスが持つ『森の民』に関する知識が誤っているのか？

「それじゃ、これから鍵を開けるから、ちょっと待ってて」

屋敷の扉は立派な造りをしており、金属の鍵穴までついている。こんな小さな村には不似合いな代物だ。なにやら気になるものを感じたものの、弾むような足取りで中に入っていくリユーナにそんな質問をする気にはなれない。

そこでアルスは、屋敷の食堂でリユーナの用意してくれた料理を食べながら、遅れてやってきたジムに尋ねた。

「ジムさん。それにしても、この屋敷はずいぶん立派なものですね」

「いやあ、実は私どもの村は、よその『森の民』の村と違って外の人との交流を盛んにしているんですよ。それで、やってきたお客さんに安心してくつろいでいただけるようにと村人総出で建てましてね」

ジムの口からは、立て板に水が流れるようにすらすらと言葉が出てくる。とても嘘をついているようには見えない。

「そうそう。それ以来、この村のなけなしの食料目当ての盗賊も現れなくなっただしね」

しかし、リユーナのこの一言で途端に顔色が変わってしまう。

「ま、まあ、被害が我々のみならず外からの人にまで及ぶとなれば、領主様も黙ってはいないでしょうから、盗賊どももそう考えたのではないのでしょうか」

あわてて言いつくろうが、なにやら様子がおかしい。

しかし、アルスにとって、そんなことはどうでもよいことだった。たとえこの村にどんな事情があつたとしても、ただの傭兵でしかない自分が立ち入るような話ではない。

と、思っていたところへ――

「とはいうものの、今日のようなことがあると不安で仕方ありません。それでその、申し上げにくいのですが……」

「何でしょう？」

ジムがなにやら言いにくそうにしているので先をうながすと、彼は意を決したように切り出した。

「あなたのお力を見込んでお願いがあります。どうか、盗賊どもを退治してはいただけないでしょうか？」

「お父さん！ 何言ってるのよ。アルスにそんなこと言ったって……」

リユーナは突然のジムの言葉に驚いて声を張り上げた。

「あ、ああ、そうだな。済まない。つい余計なことを。……やつらは自分たちのことを『赤の狼』であると名乗っております。国中を荒らしまわる凶悪な盗賊団ですし、申し訳ありません。無理なお願

いをしてしまいました。忘れてください」

ジムは娘の声で慌てて我に返ったかのように言い繕う。

一方のアルスは首をかしげて考える素振りをしていたが、やがて口を開いた。

「『赤の狼』といえば、このところ噂になっている盗賊団ですね。それなら第五騎士団に訴えてみたらどうでしょうか？ あそこの騎士団長ならこんな事態を放っておくはずがありませんから」

しかし、ジムはその言葉にも首を振った。

「我々は『森の民』です。騎士団が動いてくれるはずがないではありませんか！」

「カルロス団長はそんな差別をするような人ではありません」

「あなたはわかっていないのです！我々がどんな差別を受け、地べたを這いつくばるような生活をしているかなど……」

ジムの様子は明らかに先ほどまでと変わっていた。リユーナとは違い、よほどに「森の民」の置かれている状況に不満があるのか。

「お父さん……」

がつくりとうなだれるジムにリユーナが気遣わしげな声をかける。沈黙がその場を支配するなか、アルスが軽く息をつくようにしてから言った。

「わかりました。俺一人でどこまでできるかわかりませんが、引き

受けましょう」

「そんな！ 無理に決まってるじゃない！ 一人でなんて」

思いがけないアルスの言葉に、リユーナは激しく反対した。しかし、アルスは軽く笑って答える。

「問題ない。やりようはいくらでもある」

そう言い切れるだけの根拠など、まったくない。

規模の知らない盗賊団を自分ひとりで壊滅させられるなど考えるほど、アルスは自信家なわけでもない。だが、依頼として引き受けたなら、これはもう自分の『戦い』だ。アルスにとってはそれだけで充分だった。――勝ち目など、むしろ無い方がいい。

「駄目よ！ こんなことでアルスが死んじゃったら、わたし、どうしたらいいか……」

「俺は傭兵で、依頼を受けたただだ。君が責任を感じることはない」

確かにリユーナに連れられてこの村に来たことが発端だとはいえ、自分で選んだことだ。しかし、リユーナは首を振った。

「そんなの関係ないじゃない！ わたしはアルスに死んでほしくないの！」

「……」

アルスは言葉を失った。『死んでほしくない』とは、死ぬために

生きているような自分には実に相応しくない台詞だ。滑稽ですらある。

それなのに、なぜこんなにも心を打たれるものがあるのか。知り合ったばかりの少女。その彼女が恩義を感じている自分を心配して言った、ただそれだけの言葉。

「だから、無茶はしないと約束してくれる？ 盗賊なんて退治できなくても、生きて戻ってきてくれれば、それでいいから」

「……ああ。約束する」

——今、わかった。言葉のためではない。心の底から自分を心配している瞳。どうして会ったばかりの人間をそこまで、と思うほどの真剣な眼差し。

どこまでも自分とは違う。それは、生きることの意味を何よりも知っているからこそ、なのかもしれない。そう思った。だからこそ、果たすつもりのない約束を——果たせるはずのない約束を、してしまったのだ。

ジムはといえば、まさか引き受けてもらえるとは思わなかったのか、驚いた顔をしており、むしろ戸惑っているようでした。

「本当ですか？ も、もちろん謝礼はできる限りお支払いいたします。……い、いや、本当にありがたい話です」

リユーナはなおも心配そうな顔をしていたが、アルスは心配いらないと告げると翌日の朝には早速村を出た。

赤の狼（１）

『赤の狼』

国内有数の盗賊集団であり、その規模はよくわかっていない。総数一万を数える一国の軍隊にも匹敵するものであるという人もいれば、いたって小数精鋭のみで移動と収奪を繰り返しているという人もいる。

なぜなら、『赤の狼』は帝国内ならどこにでも現れ、まさしく神出鬼没の存在だからである。ゆえに、たった一人で彼らの居所を突き止めて退治するなどということは、まず不可能だ。

アルスにしても本気で何とかできると考えているわけではない。それどころか、ジムが何をたくらんで自分にこんな依頼をしたのかということもどうでもよかった。

ただ、万が一にも盗賊団の居所がつかめたなら、乗り込んでいて一人でも多くの敵を道連れにして死ぬ。

三年前のあの日から、生に対する執着心はほとんどなくなっており、死ななければと思う気持ちが常に胸の内を支配していた。

あれ以来、久しぶりにバロックの森を訪れたことで、そうした思いはよりいっそう強まっている。目の前で勇敢に戦って死んでいく親友たちを見捨て、一人生き残ってしまった自分。死ぬとしても自殺するのではだめだ。彼らと同じように戦い、戦死しなければあの世であわせる顔がない。

人から見れば実に愚かしい考えではあったが、アルスは本気だった。

——アルスはバロックの森から外に出るまで、決して気を抜いていたわけではない。物思いに沈もうと何をしていようと、若いながらも幾多の戦いに身を投じてきた『傭兵』である彼は、周囲への警戒など呼吸も同然の行為だった。

——にも関わらず

「やつと森から出られたね。ところで、どこに向かうの？」

そんな声が、誰もいないはずの背後から突然響く。

「なに！？」

驚いて振り返れば、そこには森の民の少女、リユーナがいた。相変わらずの狩人風の出で立ちだが、今は背に弓も背負っている。

「きゃ！ ど、どうしたの？ 急に？」

驚いたような顔で目を瞬かせるリユーナ。

「……いつからいたんだ？」

「え？ いつからって……村から出ていくところをずっとついて来たんだけど……」

——嘘だ。心配がなかった。

喉元まで出かかったそんな言葉を、アルスは飲み込む。

「どういっつもりだ？ どうしてついてきたりしたんだ？」

「だ、だって！ わたしの村のことなのよ？ あの時はいったけど、やっぱりアルス一人に危険な真似をさせて、自分は何もしないなんてできないわ」

「だから、ついて来たと？ わかっているのか？ 相手は盗賊だ。命の保証はない。早く村に帰るんだ」

アルスは特に表情を変えないまま、突き放すように言う。

「……どうして、あんな無茶なお願いを引き受けてくれたの？ どう考えても一人でなんて無理じゃない！ ……どうしてかわからないけど、あの後、すごく不安になったの。もしかして、もう帰ってこないんじゃないかって……」

「……心配性だな、君も」

アルスは呆れたように軽く溜め息をつく。だが、彼女の鋭さには内心で舌を巻く思いもあった。

「……心配しなくても、盗賊の巣に突入するつもりなんて最初から無い。近くの街には第五騎士団の駐在所があるはずだ。盗賊の情報を集めたうえで、そこに通報するだけでも意味はあるだろう。ジムさんは信じなかったが、第五騎士団なら必ず動く」

アルスは、彼女を納得させるためだけの言葉を口にする。

「そ、そっか……」

「わかったら、村へ帰れ」

「うっん。だったら、わたしも行く。情報を収集するのだって、一人じゃない方がいいでしょう？　わたしにも手伝わせて」

意志の強い瞳は、頑として折れそうもない。アルスはそれを見てとると、再び小さくため息をつく。

リユーナの言葉は、まるで子供のようない分だ。どう考えても彼女は足手まといにしかないだろう。——だと言うのに、アルスは彼女を見つめてこう言った。

「……街中とはいえ、危険がないとは限らないぞ？　手分けして情報収集にあたるつもりなら、最低限自分の身を守るくらいはできないければ連れて行くわけにはいかない」

事実上、彼女がついてくることを認めたようなものだ。

「ありがとう！　大丈夫よ。わたしはこれでも素早い方だし、弓だって得意なのよ？」

胸を張って笑うリユーナの姿を、眩しそうに見つめるアルス。

「……また、死に損なったかな」

「え？」

アルスの呟きにリユーナが不思議そうな顔をする。アルスは彼女についてくるように促すと、ゆっくりと歩き出した。

とりあえず、盗賊についての情報を集めるため、近場にある町を目指した。バロックの森から南へ行ったところにあるレーヴェンの

町がそれである。この町は南の交易路沿いに位置することあつて、宿場町としても商業都市としても栄えている。

バロツクの森の南部地域はルクレールとの国境に城塞を構える第五騎士団の管轄地域にもなっているため、この町には騎士団との連絡所が設けられている。第五騎士団は、団長の意向もあつて連絡所からの情報を軽視したりはしない。とはいえ、何の根拠もない情報を鵜呑みにして動いてくれるほど暇でもないため、情報収集はどうしても必要だ。

こうした町で情報を集めようとするなら、行商人の集まる市場か、旅人のための宿屋を兼ねた酒場のどちらかに行くのが定番である。アルスも三年間の傭兵生活でそうしたことを知っていた。

「えっと、それじゃあどっちがどっちに行く？」

「……君を酒場へ行かせるわけにはいかないだろう。市場に行つてくれ」

「うん！ まかせて！」

「集合場所はこの連絡所の前だ。迷子になるなよ？」

「もう！ わたしは子供じゃないんだから！」

怒ったようにそう言うと、リユーナは街へと駆けていく。まるでエネルギーの塊のような元気な姿を見送りながら、アルスは一人つぶやく。

「……とりあえず、彼女を村へ無事に送り届ける必要がある。無茶

はできないな」

それから、酒場に向かった。

扉を押して中に入ると、予想通りの喧騒が目、耳に、飛び込んでくる。

酒盃を掲げて歌いだす者。

看板娘らしき女性に口説き文句を囁き、あっさりあしらわれている者。

激しい言い争いから今にも取っ組み合いの喧嘩を始めようとする者。色々だ。

ウェイトレス姿の女性が注文を確認してくるので、適当に飲み物を頼むと、早速聞き込みを始めることにした。

酒場での情報収集は思ったよりも難航した。旅人たちは人恋しいのか、こうした場所においては見知らぬ相手でも気さくに話をする。

だが、『赤の狼』のことを話に持ち出すと、途端に彼らはげんな顔をしてアルスを見た。どう見ても役人には見えない若者が、国内でも指折りの盗賊団のことを調べ回っているというのだから、きな臭いものを感じても仕方がないのかもしれない。とはいえ、彼らの反応というものは、まるで薄気味悪いものでも見ているかのようなのだ。

とある事情から帝国国内より隣国のルクレールで旅の日々のほとんどを費やしていたアルスにとっては、帝国で『赤の狼』の名がここまで恐れられているとは予想外であった。

さらに、たちの悪いことに情報を持つているというものがいても、情報をよこせという怪しい輩がほとんどなのだ。アルスもまったく手持ちがないというわけでもないのだが、なけなしの金を渡して

ガセネタをつかませられたのでは目も当てられない。

相当の時間を費やし、やはり無理だったかとあきらめて酒場を出ようとすると、ちょうど一人の男が声をかけてきた。

「なあ、『赤の狼』のことを探してるんだったら、俺がいい情報持ちてるぜ」

アルスが声のした方を見ると、そこには猫背で貧相な顔をした男が立っていた。

「そのかわり情報料を寄せせというのだろう？ あいにくだがそんな金は……」

「ちょっと待った！ 金はいらねえよ。おれも『赤の狼』にはひでえ目にあわされてるんだ。あんたが何者か知らねえが力になるぜ」

男は屈託のない顔で笑ってそう言った。

「お前の方こそ何者だ。信用できないな」

「おいおい、俺はただの革細工職人だよ。とにかくここじゃあ落ち着いて話もできねえ。場所を変えようぜ」

身なりこそ本人が言うとおり、職人風のポケットの多い服を着ているものの、怪しいことこの上ない男ではある。しかし、正直途方に暮れていたアルスにとってはこの男について行くより他はなかった。何かの罠かもしれないが、街のゴロツキ程度の連中に殺されてやるほど弱いつもりもない。

男はこの町の地理に詳しいらしく、表通りから一本脇道に進むとひっそりと静まりかえった裏通りへと入っていった。表通りには商店や宿屋が並んでおり、人々もにぎわいを見せていたが、ひとたび裏通りへと入ると小汚い建物や散らかったゴミなどが目立つ。

ここはこの町で商売に失敗したり、犯罪を犯したりして落ちぶれてしまった人々が乞食となつて暮らす場所なのである。

「こんなところで話をするのか？」

「まあまあ、そう言うなつて。ここなら人もいないし、落ち着いて話もできるだろうが」

男の言葉にアルスは周囲を見渡した。なるほど、乞食たちも今の時間は表通りに施しでももらいに行っているのだろう、ほとんど人がない。

だが、アルスの鋭敏な感覚は、近くに潜む人間の気配を読みとっていた。

「なるほど、確かに酒場よりは少ないようだな。やましいところがないようなら、出てきたらどうなんだ」

アルスが物陰のひとつに向かって言い放つ。

「——へえ、気づくとはたいしたもんだな。まあ、隠れていようとしてたわけじゃないけどな」

その声とともに出てきたのは四人の男たちである。それぞれが腰に剣を差しているところから見ても、間違いなく物乞いの類ではな

い。

と、同時にここまでアルスをつれてきた男も素早く四人組のもとへと駆け寄っている。やはり罠だったようだ。とはいえ、アルスがたいして金目のものなど持ち合わせていないことぐらい見てわかるだろうに、何の目的があつてのことなのか。

そんなことを訝しんでいるうちに、今や五人となつた男たちの一人が声をかけてきた。

「よお、悪かつたな。だますような真似をして」

その男は、意外なほど人懐こい口調で話しかけてきたが、さらに意外だったのはその男の風貌である。他の四人がどう見ても三十代後半から四十代ほどに見えるのに、その男だけは二十代半ばほどといったところだ。

しかも、輝くような銀の長髪と白皙の肌に寒気がするほどの美貌を備え持ち、すらりとした長身のその姿からは、まるで貴族のような気品すら感じさせる。一方で、男の目には強い意志の光が宿っており、同時に愛嬌のあるその表情は、貴族的な印象を見事なまでに裏切っていた。

アルスは一行のなかでもリーダー格らしいその男をまっすぐに見据えた。すると、男の目と視線がぶつかる。光の加減で青にも黒にも見えるような色合いの瞳だ。どこかで見たことのあるような色に思えた。

「近頃の物乞いってやつは、追いはぎの真似ごとをするのか」

「残念ながら俺たちは物乞いじゃない」

「ならば何者だ」

「――赤の狼」

瞬間、アルスは反射的に剣の柄に手をあてた。するとすかさず、銀髪の男を取り巻く四人の男たちが剣を抜いて構える。

途端に緊張感の漂う空気のなかで、銀髪の男だけが唯一剣に触れてもいない。それどころか不敵な笑みを浮かべ、面白そうにこちらを見ていた。

一触即発のこの状況が嘘のように泰然と構えたこの男は、相変わらずの口調のまま言葉を続けた。

「まあまあ、落ち着けよ。何も殺そうってわけじゃない。あんたが何者なのか、何の目的で俺たちを探っているのか聞きたいだけだ」

「答える必要はない」

アルスはゆつくりと剣を抜いた。

「おい、正気かよ。五対一だぜ、五対一」

銀髪の男はそう言いながらも剣を抜かない。

「そんなことは関係ない。お前たちこそ油断していると痛い目を見るぞ」

とは言ってはみたものの、思っていたより厳しい戦いになりそうだった。五対一という状況からしてもそうだが、何よりこの男たちは森で会った盗賊たちとは違う。四人それぞれが隙を見せずに構え

をとっている姿などは、あたかもどこかの国の正規軍を思わせるほどだ。

銀髪の男はいえ、いまだに腕を組んだまま構えようとしないうが、雰囲気から察するにただ者ではない。

ふと、銀髪の男が面白そうな微笑をひらめかせた。

「たいした自信だな。面白い。一対一で勝負だ」

そう言いながら仲間たちを下がらせると、おもむろに剣を抜いた。こんな有利な状況にありながら、わざわざ一対一で勝負しようというのだ。この男がリーダーであるなら他の男たちが止めてもいいものなのに、誰もそうしようとしない。呆れたようにお手上げのポーズをしている者はいても、一様に静観の姿勢をとるつもりの方がある。どうやら余程にこの男の腕に信頼を寄せているらしい。

ともあれ、アルスにしてみれば願ってもないチャンスであった。敵のリーダーを倒すことができれば、他の者の戦意を挫くことができる。うまくすれば人質にできるかもしれない。どうせ死ぬつもりではあったが、リユーナのことがある以上、ここで死ぬわけにはいかない。……それに死ぬときは、『戦い』の中で死力を尽くしてから死ぬべきだ。

「後悔するなよ。行くぞ！」

アルスは一瞬にして間合いを詰め、斬りつけた。

「うお、速い！」

男たちが驚きの声を上げる。だが、並の剣士なら反応することす

ら難しいその一撃を、銀髪の男はかるうじて防いだ。

しかし不十分な体勢で受けたために大きくよろめき、後退する。アルスはすかさず続く一撃を叩き込むべく踏み込んだ。たちまち激しい剣戟のぶつかりあう音が響き渡る。

「うわっ たっ たっ たっ…！」

しかし、恐るべきことに銀髪の男は体勢を崩したまま、アルスの苛烈な斬撃のことごとくを捌き切っていた。

切り下ろし、横薙ぎ、刺突、あらゆる攻撃をフェイントも織り交ぜながら繰り出していく。アルスはなおも後退する相手を追いつめるように攻撃を続けるが、刹那、こめかみのあたりに強い衝撃を受けてたまらず地面に倒れ込んでしまう。

一瞬、他の誰かが横から攻撃してきたのかと思ったがそうではない。銀髪の男が死角から放った回し蹴りを受けたのだ。体勢を崩したこと自体、こちらへの誘いだっただのかもしれない。

だが、悠長に考えている余裕はない。相手はこちらが立ち上がるよりも速く攻撃をしようと間近まで迫っているのだ。

「うわっ とー！」

だが、その寸前で銀髪の男は素っ頓狂な声を上げて跳び退いた。その一瞬後にアルスの跳ね上げた足が空を切る。股間の急所をねらったの蹴りだ。そしてその足の反動を使って跳び起きざまに斬りつける。が、銀髪の男はさらに後ろへ飛び退くと、こちらとの距離をあけた。

「おっかねえことすんなあ。だいたい運が悪けりゃ、足がばっさりいっちまうだろうに」

秀麗な顔に似合わぬ粗野な言葉遣いである。

「そのときは、同時にお前の足でも切ってやったさ」

実際には不可能としか思えないようなことであるが、アルスは平然と言つてのけた。すると、銀髪の男はこれまでにないほど真剣な顔つきになる。

「……なあ、やっぱり理由ぐらい話してくれないか？ 誰かの敵討ちだつてのならあり得ないこともねえけど、でなけりゃそこまで恨まれる覚えはないぜ」

「国中を荒らし回る盗賊の台詞とは思えないな」

「だから、そこがそもそもの間違いなんだよ。俺たちは盗賊なんかじゃない」

「だったら何だというんだ。各地で略奪行為を繰り返す輩が盗賊ではないというのか」

アルスの言葉に、銀髪の男は疲れたようにため息をつく。

「俺たちはなあ、反帝国組織なんだ。略奪つていつても狙つてるのは帝国軍の輸送隊か貴族連中の荷馬車ぐらいのもんだ。それを皇帝が国内で起きた盗賊行為を俺たちのせいにしてやがるんだよ。国内の不満を俺たちに向けさせるためだかなんだか知らねえけどな」

「どちらにしろ、盗賊と似たようなものには違いあるまい」

アルスは冷ややかに応じながらも、なるほど思った。『赤の狼』が神出鬼没なのも、規模が不明なのも、そう考えればつじつまが合う。

「とにかくだな。俺たちは無駄な殺しは絶対やらねえし、ましてや一般大衆からの略奪なんてのは、もつてのほかだ。——あんだ、もしかして輸送隊の護衛兵の身内か何か？　もし、そうなら話はわかる。輸送隊襲撃のときは一人も殺さないってわけにもいかないかな」

「いや、そうじゃない。俺はただの傭兵で依頼を受けただけだ」

「いったい誰から？」

「依頼人のことをそう簡単に話せるわけがない。強いて言うなら被害者の人だ」

アルスが言うと銀髪の男は困ったような顔になった。

「それじゃよくわかんねえけど、いったい何で『赤の狼』の仕業だつてことになったんだ？」

「盗賊がそう名乗ったんだそうだ」

アルスがそう言った途端、銀髪の男の目が鋭くなった。もともと秀麗な顔つきのこの男がそんな表情をすると、それまでの人を食ったような印象が一変して王者の風格にも匹敵するものを感じさせる。さすがにこの若さで『赤の狼』のリーダーをしているだけのことはあるようだ。

「なるほどな。俺たちの悪評をいいことに『赤の狼』の名を騙ろうとはいいい度胸してやがる。俺たちをなめるとどうなるか思い知らせてやらなきゃな」

「てことは団長。やるんですか？」

「あんまり、やっかいごとに首をつっこまない方が……」

『赤の狼』の男たちが口々に言うが、銀髪の男は聞く耳持たない。

「何言つてやがる！ このまま『赤の狼』の名で悪事を働かせておくつもりか。俺たちの名誉挽回のいい機会じゃねえか」

「そりゃ、そうですけど……」

「よし。そうと決まれば話は早い。さすがにこの人数で行くわけにはいかねえから、団員を招集してこい」

すっかり置いてきぼりにされて啞然としていたアルスではあったが、黙ってみているわけにもいかない。

「ちょっと待て。お前たちが嘘をついていないという証拠がどこにある」

「だったら、あんたも一緒に来ればいいだろうが。さすがに目の前で盗賊退治するところでも見りゃ、あんたも信用するだろ？」

銀髪の男はそう言って笑ったが、アルスは腑に落ちない顔をした。

「そういうわけにはいかない」

「なんでだ？ 畏だと思ってるのか？」

「……ただ、信用できない。それだけだ」

とは言うものの、アルスは内心で迷いを覚え始めていた。どうやらこの男の言うことは本当のようだ。確たる証拠はないが、他の連中とここまで即興で演技をするというのも無理があるだろう。——
なにより、この男は、くだらない嘘や卑怯な畏に頼るような人間には思えない。そう確信させるだけの雰囲気、彼にはあった。

沈黙していると、とどめの一言が彼から発せられる。

「ひょっとして、連れがいるんじゃないのか？ ——黒髪の可愛い女の子の」

「……彼女に何をした？」

低い声でアルスが唸る。

「人聞きの悪いことを言うなよ。別の場所で他の団員が事情を聞いてやってるところさ。……ただ、なんていうかあれだな。彼女、人を疑うことを知らなすぎだぞ？ よくあんな娘を単独行動させたりしたもんだよ」

そう言われては言葉がなかった。彼女が街慣れしていない「森の民」の少女だということを、すっかり失念していたようだ。それと言うのも、アルスがそれまで抱いていた「森の民」のイメージに比べ、リユーナがあまりに知性的で品のある少女だったせいだ。

「……同行する。まず、彼女のところに案内してほしい」

アルスとしては、そう言うしかない。すると銀髪の男は酷く申し訳なさそうな顔をした。

「……悪いな。結局、人質を取ったみたいな形になっちまった。ただ、俺はこれ以上あんたと戦いたくないし、あんたには何故か、俺のことを信じてほしいと思ったんだ。心配しなくても彼女は無事だよ。っていうか……うちの団員の方がある意味、無事じゃないな」

「どういう意味だ？」

アルスの問いに銀髪の男は、肩をすくめるだけで答えようとはしなかった。

赤の狼（2）

グレイ・ハーバードと名乗った銀髪の男に連れられて、アルスは市場の一角にある休憩所に辿り着いていた。そこは市場で購入したものをその場で飲み食いしたりできるような旅人向けに設けられたもので、ベンチとテーブル、雨や日差しを防ぐための簡易な屋根で構成されたスペースとなっている。

「はい、これなんかおいしいぜ？ この街の特産品なんだ」

「あ、ほんとだ。すごくおいしい！」

「だろう？」

「ほら、リユーナちゃん、こっちもどうだい？」

「うん、ありがとう！」

アルスは、目の前で何が起きているのかを理解しかねていた。

——リユーナは、手渡された菓子を実においしそうに食べたかと思えば、すかさず差し出された飲み物をごくごく飲んでいた。

アルスが呆氣にとられて固まっていると、今度は楽しそうな会話が聞こえてくる。

「そうそう……春になるとね？ 森の中に、シアントフラワーが一齐に咲き乱れる場所があるの。ふふ！ わたししか知らない秘密の場所なんだけどねー」

「へえー、いいなあ……。一度見てみたいよ」

休憩所のベンチに座るリユーナの周囲には、鼻の下をだらしなく伸ばした若者たちが数人、しきりに彼女に向かって話しかけていた。

「だめよ。お父さんにだって教えてない場所なんだから。あ、それでね？ 真っ青に広がる花畑がまるで海みたいに見えるのよ。わたし、海って見たことないんだけど、本で読んだからきつとそうよ」

「海、見たことないんだ？ あ、じゃあじゃあ、今度、俺が海を見せてあげるよ！」

「ほんと？ でも、遠いんでしょ？」

「大丈夫、馬に乗ればひとつ走りさ！ そ、そうだ、良かったら俺の後ろに……ふこー！」

グレイの鉄拳が、中でも特に熱心な様子で話していた一人の若者を黙らせる。

「いてて！ あ、だ、団長！」

「『だ、団長』じゃねえよ。何をやってるんだお前らは」

呆れたように言いながら、若者の頭に再び軽く拳を落とすグレイ。

「いた！ や、やめてくださいよ。その、団長の言うとおり、丁重におもてなししてたんじゃないですか」

不満そうに頭を押さえる若者は、何が嬉しいのか頬を赤く上気さ

せている。

「あ！ アルス！ アルスもこの人たちに会えたんだ？ とっても親切な人たちなのよ？ なぜかいろいろと食べ物も分けてくれたし、つい話し込んだじゃった！」

アルスの存在にようやく気付いたリユーナは、満面の笑みを浮かべながら手を振ってきた。きわめて上機嫌なようだ。アルスはゆっくりと彼女に近づいていき、力の抜けた声で話しかける。

「……そうか。それは、良かったな」

「うん」

アルスはなんとなく彼女の頭を撫でてやりながら、 그레이に説明を求めるような視線を向けた。

「言っただろ？ うちの団員の方が無事じゃないって。まったく、すっかり骨抜きにされちまいやがって……」

苦笑する 그레이に対し、アルスはやれやれと肩をすくめる。

一方、頭を撫でられていたリユーナは、最初こそ気持ちよさそうに目を閉じていたものの、途中で何かに気付いたようにその手を払いのけてきた。見れば、何やら不満そうな抗議の目でこちらを見上げてきている。子ども扱いされたことを怒ったようだ。

ここに来てようやく、アルスはこの『赤の狼』と名乗る彼らに対する警戒心を解くことにした。——と言うより、リユーナのこんな様子を見せられては、警戒するだけ馬鹿らしい気もしてくる。

「で？ どうする？ 別に盗賊退治は俺たちだけでやったっていいんだが……」

「いや、これは俺の仕事だ。俺も行く」

「そうかい。よかった。信用してくれたみたいで何よりだ」

「え？ え？ どういうこと？」

リユーナが不思議そうな顔で二人の顔を交互に見ていた。

山道を歩くアルスと『赤の狼』の一行は総勢二十人近くにもなっていた。

リユーナもまた、この一行に同行している。むろん盗賊退治に行させるのは危険が伴うため、最初は町に置いて来ようとも考えたが、彼女はついてくると言って断固として聞かなかった。

実際のところ、アルスとしても『赤の狼』を全面的に信用できたわけでもないため、彼らに任せてリユーナを街に残してしまうことには不安があつた。そんな葛藤の末、結局は戦いが始まったら安全な場所に隠れるということを条件に、同行させることにしたのだった。

——その後、グレイは仲間を呼び集めると、一斉に付近を荒らす盗賊団についての情報を集めはじめた。人数が多くなったせいもあるだろうが、こういうことにはアルスの知らないこつのようなものでもあるらしく、すぐにめばしい情報を得ることができた。

それによるとレーヴェンの町から、北東へ少し離れたところにあるティルツ山という場所を根城にしている盗賊団があるらしい。

地元の領主もむろんこの盗賊団のことにつすうす感づいてはいるはずだが、襲われているのは主に旅人であり、犯行自体が領地外で行われていることもあってか本腰を入れての取り締まりはなされていない。

「自分の領地に被害がなければ他はどうなってもいいってんだからな。ご領主様が聞いて呆れるぜ」

事態を把握するうちに 그레이 が吐き捨てるように言った言葉には、アルスも思わず共感してしまった。

本来領主というものは、そこに暮らす民草の暮らしの安全を守ることを前提としてこそ領主たりえる。しかし、だからといって領地外のことや旅人の安全に無頓着であっていいはずがない。流通経済機構が整いつつあるこの時代においては、すべてのことが一領地内で片づき、自給自足が可能であることなどあり得ないのだから、なおさらである。

しかし、実際問題としては、領主のせいばかりにするのは酷だといえよう。領主が自分の手勢を動かして盗賊団を退治しようにも、許可なく他の領主の領内まで軍を進めるわけにもいかない事情がある。

そんなことをすれば領主同士での戦闘沙汰にもなりかねないからだ。自分の手勢に被害を出したあげく、そんなことになれば目も当てられない。

こんなときこそ、領地に縛られない騎士団をはじめとする皇帝直属の軍隊の出番のはずだが、動き出す気配はないらしい。ここまで情報が知れ渡っているとすれば、アルスが通報するまでもなく、騎士団も事態を把握しているだろうに、いったいどういうことなのか。ここは第五騎士団の管轄地域も近く、あの騎士団長の人柄からい

ってもこんな状況を放置しておくはずがないのだが。

——もうひとつ、気になることがある。

確かにバロックの森からティルツ山まではそう遠くない。しかし、収集した情報によれば、彼らが襲っているのは行商を行うキャラバン隊がもっぱらであり、領主に目を付けられやすい近隣の村への襲撃などは行っていないようだ。

ならばなおさらのこと、襲ったところで実入りの少ない『森の民』の村をわざわざ狙うようなことがあるだろうか？ 何か裏があるような気がする。場合によれば、報酬を得るところの話ではない可能性もある。

しかし、もともと報酬などアルスには関係がない話だった。盗賊団が帝国内を荒らしているのは確かであり、それを退治することをやめる気もない。なにより、自分は常に戦いのなかに身を置いていなくてはならない人間なのだ。

「おい、アルス。聞いてんのか」

「え？ ああ」

アルスはようやく気づいて返事をした。

グレイは、アルスに対してかなりうち解けた話し方をしてくる。父親が大陸東部でも屈指の騎士となつてからは、ごく限られた友人を除けば、こうした親しげな話し方をしてくるものなど皆無に等しかった。

もちろん、三年間の傭兵生活のなかでは自分の素性を明かしたりはしなかったし、今もグレイにはただの旅の傭兵で通しているのだが、それでもアルスの身にまとう雰囲気ゆえか、誰もが皆、どこか

よそよそしい話し方をした。

しかし、グレイといえば、誰に対してもそうなのかもしれないが、まるで十年來の友人でもあるかのような態度なのだ。ただ、アルスには、なぜかそれが心地よいものに感じられた。

「……やれやれ。じゃあ、リユーナ。このねぼすけさんに、お前が見つけたものをもう一度説明してやってくれよ」

「え？ うん」

グレイに促されてリユーナが地面を指差す。

「ほら、これ見て。雨が降って何日もたってせいで、しっかりと足跡が残ってる」

言われて足元を見るが、リユーナの言う足跡がどれなのかよくわからない。指差された場所は確かに土が窪んだようになっていて、これが本当に足跡なのだろうか？

「動物の足跡を探すのは得意なの。だから間違いないわ。だいたい十人以上の人が歩いた足跡ね」

……なるほど、滅多に人が通らないような山道であるにもかかわらず、それだけの数の足跡があるとすれば、盗賊団のような連中である可能性は高い。

「日が経っちゃったからわかりづらかったとはいえ、自分たちの足跡も消していかないとはな。よっぽど油断しているってわけだ」

グレイが呆れたように肩をすくめる。

「そのような。もしこの足跡が盗賊のものならば、の話だが」

アルスの言葉に、今度はリユーナが首を振る。

「うーん、間違いないんじゃないかな？ こんな草の中に好きこのんで入っていく旅人は流石にいないと思うし……」

リユーナが指さした先は、ちょうど彼女が言う『足跡』らしきものが山道の脇へ向かって続いているところだった。

道の脇は膝丈ほどの草むらに覆われており、足場は多少ぬかるんでいる。少し進むとすぐに下り斜面に出くわした。崖と言うほど急な傾斜ではない。

ここからは一転して林になっており、降りるには転ばぬように細心の注意が必要なほどの足場の悪さである。生い茂る木々が邪魔で坂の下の方はよく見えなかった。

「なるほどな。ちょうどここらへん一帯が谷になっているんだな。盗賊のアジトにはもってこいだ」

グレイが木に手を当てて、寄りかかりながらつぶやく。

「とにかく、敵のアジトが見える目立たない場所まで行って対策を考えよう」

アルスの言葉に頷いて一同は慎重に坂を下り始めた。

そしてその夜、アルスと『赤の狼』の一行は行動を開始した。アルスたちが今いる場所からは下の様子がよく見える。もともとあまり深い谷ではないが、底には小さな川が流れている。

そしてそのほとり、比較的広い平地に十軒ほどの小屋が建っている。おそらく、地ならしをしてから建てたのであろうが、お世辞にも人が住むのに適しているとはいえない。それこそ、盗賊のようなものでもなければ住みたいとは思えない。

とにかく、アルスたちは立ち並ぶ小屋へと坂を下りて接近していく。

小屋の周囲には、山賊刀を手にした数人の男たちが見張りとして立っていた。だがそれも形式的なものでしかなく、どの男たちも眠そうにあくびをしたり、仲間と立ち話をしたりと油断しきった様子である。

そこへアルスと『赤の狼』の一行は、唐突に襲いかかった。周辺の斜面に散開した状態から関の声をあげつつ、小屋に向けて一斉に火矢を放ったのである。

「うわあ！ 敵襲だ！」

突然の出来事に見張りの男たちは狼狽の悲鳴をあげた。こんなところに敵が襲いかかってくるなどとは夢にも思っていなかったのに、四方八方から火矢が射かけられたのである。続いて周囲の異変に気がついたのか、小屋の中で眠っていたらしき男たちも飛び出してきた。

「おい、こりゃあどういうこった。なんで火事になってやがる！」

なかでも親分らしいひげ面の男が、近くの見張りを締め上げるようにして尋ねている。

「わ、わからねえです。あたりから突然火矢が……」

「火矢だと？ まさか、領主軍でも攻めてきたつてのか？」

親分は首をかしげて唸った。そんなはずはない。自分たちは努めて領主のことを刺激しないよう、強盗を働くときには別の場所に拠点を設け、地元から離れた場所でやってきたはずなのだ。ましてや、こんな山の中に一軍を派遣してまで自分たちを退治するほどの利益がここの領主にあるとは思えない。

そうしている間にも、火はますます勢いを強めてきている。雨が降った後でしめつているとはいえ、木材で造られた小屋は一度火がついてしまえばどうにもならない。

「てめえら、ぐずぐずしてないでとつと火を消せつてんだ！」

親分はさすがに他のものよりは落ち着いている。狼狽しきっている子分たちを怒鳴り散らすと消火作業の指示を出した。

「くそ！ どうなつてやがる。だいたい、火矢を射つてきた連中はどうして姿をみせねえんだ？」

親分はいぶかしげにあたりを見回す。これだけのことをやってのける連中ならこの機に乗じて襲いかかってきてもいいはずである。それが、まったく気配すら感じられないのだ。

「お頭！火の方は何とかかなりそうです。敵の方はどうしやす？」

子分の一人にそう聞かれて、ようやく思いつくところがあった。

「そうか。何者かは知らねえが、奴らは思ったほどの人数じゃねえんだ。火矢を射ったはいいが、小屋から出てきた俺たちの人数の多さにびびって出てこれないにちげえねえ」

「じゃあ、お頭」

「おう！ なにもんか知らねえが、ただじゃおかねえ。消火は最低限の人手を残して後の奴は徹底的に山狩りだ！ ぜってえ逃がすな。ぶっ殺せ！」

親分の言葉に子分たちは一斉にうなずくと、手に手に武器を持って殺気だった様子で山のなかへと入っていった。

赤の狼(3)

そして、数時間後。盗賊の親分は得体の知れない不安にとらわれていた。

「おかしい。なんだって誰も戻ってこねえんだ？」

敵を発見できたにせよ、できなかったにせよ、もうそろそろ戻ってきてもよさそうな時間である。一人や二人が戻ってこないというならまだしも、山狩りにいった連中は自分たち盗賊団の半数を超える二十人以上なのだ。

「親分。ちよつと探しにいつてきやしょうか？」

「いや、待て」

親分は自分の動きを手で制すると、ひげに覆われた顎に手を当て、低くつぶやいた。

「まさか、まさかとは思うが、全員やられちゃったってのか？」

悪い予感が胸中にわき上がってくると、どうしてもそれがもつともらしく思えてきてしまう。

……火矢を射かけたまま、沈黙していたこと自体が畏だったのではないか？

敵の狙いはこちらの戦力を分散させ、個別に片づけることにあったのではないか？

もしそうならば、見通しの悪い林の中へ油断しきって入っていった仲間たちは戻ってくるまい。

「お、おまえたち、持ち場を離れるな！ 守備を固める！」

親分の突然の指示に子分たちは戸惑い、うろたえたように周囲を見渡したが、再び大声で怒鳴られ、肩をすくめて指示に従った。

「やれやれ、ようやく気づいたようだぜ。あいつら」

その様子を斜面の木陰から見下ろしていたグレイは、面白そうに傍らのアルスに声をかけた。

「いや、この時点で気がつくなら、ただの盗賊にしてはたいしたものだ」

一方のアルスは実に素っ気ない口調である。

「よく言いやがる。あんたが立てた作戦だろうが。まさかここまで上手いくとはなあ。まったく恐れ入ったぜ」

「わたしだって、火矢の用意とか手伝ったんだからね？」

グレイの声に重なるように、頭上から声が降ってくる。

「リユーナ。声を出すな。そこに隠れていれば見つからないだろうが油断は禁物だ。それと……そろそろ潮時だろう。連中が守備を固める前に一気にたたみかけるぞ」

アルスは木の上に隠れているリユーナに忠告の言葉をかけた後、グレイたち『赤の狼』の一行に襲撃開始の合図を行う。そしてアルスは、すでに数人の敵を片づけた剣を手に、盗賊たちの方へと降り

ていく。

その背中を追いながら、グレイは内心舌を巻く思いだった。先ほどまでの戦闘の折にも一流と言えるだけの剣の腕前を見せつけられたばかりだが、そのうえこれだけの知謀知略を備え持っているというのだ。

いつそのこと傭兵などより軍の指揮官でもやっていた方がずっと似合っているのか。という素性の男なのか。大いに興味のあるところではあった。

アルスと十数人の『赤の狼』の男たちは、一斉に残った盗賊団へと襲いかかる。

「畜生！ てめえら、何者だ！」

「『赤の狼』」

「答える必要はない」

親分が必死に応戦しながら叫ぶ声に、二つの口から二つの答えが返る。

「あ、赤の狼だと！！ な、なんでこんなところに……」

銀髪の貴公子然とした男の口から告げられただけに、衝撃はいつそう大きかったかもしれないが、とにかく盗賊たちは驚愕のうめき声を発した。

「よくも、俺たちの名を騙って好き放題やってくれたじゃねえか。覚悟しやがれ！」

「聞いた限り、お前たちは罪もない人々を多く殺している。そろそろお前たちの番だな」

そう言いながらも、グレイとアルスは襲いくる盗賊たちをこともなげに蹴散らしている。グレイに切りかかった者は、一合目で剣を跳ね上げられ、二合目で首元に剣を突き込まれた。アルスを切り伏せようとした男は、一瞬で懷に飛び込まれ、胴を切り払われた。

他の『赤の狼』の男たちもよく鍛えられていて、盗賊たちに比べれば子供と大人ほどの実力差があるようだった。結果として戦闘はほとんど一方的に進み、最後まで抵抗した親分もグレイの剣の前に倒れた。

「やっと終わったか。みんな、怪我はないか！」

「ええ、大丈夫です。ハガーとジエドの二人がちよつとばかり深い傷をおってますが、それともたいしたことはありません」

結局、数人の怪我人がいたほか、誰一人犠牲を出すこともなく戦闘は終結していた。

「ただ、何人かは逃げてしまったようですが」

「なあに、気にすることはねえ。あれっぽちじゃ盗賊団なんて続けちゃいけないだろうからな」

今しがた倒した親分の血のついた剣を拭くと、グレイはアルスのところへと歩み寄る。

「あんたの作戦のおかげだな。誰も死なずに済んだ」

「……『赤の狼』というのは、正規の剣術でもならっているのか？」

盗賊の類なら、構成員それぞれがまったく我流の剣術を身に付けていることが多いはずだ。しかし、『赤の狼』の団員たちは、ほとんどが共通した特徴を持つ剣技を振るっていた。加えて、彼らの戦いぶりは、訓練された軍隊さながらに統制されたものであり、グレイ自身が言っていたとおり、ただの盗賊集団というわけではなさそうだった。

しかし、グレイはアルスの問いには答えず、手を差し出してくる。

「ありがとよ！ あんたのおかげで俺の我が儘に突き合わせちまった仲間を死なせずに済んだんだ」

そう言っただけでグレイは、あの愛嬌のある笑顔を浮かべて握手を求めた。

「べ、別に礼を言われることじゃない。一番確実性の高い作戦をとっただけだ」

アルスはなぜかうろたえたようにそう言っただけで、仕方なく握手に応じた。

「いや、違うね。あんたのこれまでの言動から言えば、あんたはあえて危険なことをやりたがるところがある。どうしてかは知らないけど。だが今回に限っては、他の連中のことも考えて安全策をとったんだ。だから、ありがとっって言ってんだよ」

グレイはそう言うと、凶星だろうとでも言いたげに笑いかけてきた。

一方のアルスはきまりが悪げにうつむいた。明らかにこの男は自分に好意的な感情を示している。他人の好意や感謝、そういった感情を与えられる価値など持たない自分に対して。そのことが酷くむずがゆく感じられるのだ。何故この男は、ここまで素直に自分の感情を表立って示せるのだろうか。

「あ！ みんな！ 無事だった？」

戦闘が終わったことが確認できたためか、斜面から恐ろしい勢いでリユーナが駆け下りてくる。

「おい！ 危ないぞ！」

思わずアルスが注意するものの、ほとんど転がるような勢いで木々の間を駆け下りてくる彼女の足取りは、全く危なげのないものだった。

「だいじょーぶ！」

と、言った時には目の前までたどり着いている。

「……おしとやかにしろとは言わないが、もう少し大人しくしてほしいな。心臓がいくつあっても足りないぞ……」

アルスがばやくように言うと、リユーナは花が咲いたような笑みを見せた。

「心配してくれたんだ？　ありがとう。でも、うちの森ならこれくらいは普通だよ？」

「……それに、どうして降りてきた。俺たちが戻るまで待つように言っただろう？」

「もう、細かいことはいいいじゃない！　あれだけ一目散に逃げてっちゃえば……誰も残ってなんかいないわよ」

リユーナは親から小言をいわれた子供のような軽口を言いながらも、ぎこちない顔をしている。

「……そういう意味じゃない。ここは『赤の狼』の彼らが始末するだろう。ほら、向こうを向け。とにかく上へ登るぞ」

アルスはリユーナの肩を掴んで回れ右をさせると、今しがた彼女が下りてきた斜面へ向かって歩くよう促す。

「……えっと、バレちゃった？」

「それだけ蒼い顔をしていればな」

リユーナが下りてきた際に、最初に目を向けた場所。そこには盗賊たちの死体があった。

「……ごめんなさい」

「別に謝ることはないだろう」

「もう少し役に立てると思ったんだけど……」

アルスはリユーナの背中を押しながら息をつく。戦闘後の後始末だけでも手伝おうとしたらしい。そういえば戦闘が始まる前にも、怪我の手当ては得意なのだと彼女が繰り返し口にしていたことを思い出す。

アルスはもう一度、息をつく。リユーナの両肩を掴んで立ち止まらせると、自分だけ振り返り、『赤の狼』に向かって声をかける。

「怪我人がいただろう？ ハガーとジエドだったか？ リユーナが治療してくれるそうだ！」

即座に反応があつた。

「まじでか！！」

「今行きます！」

二人は自分たちで済ませたであろう応急手当てをわざわざ外し、こちらへ向けて猪のごとく駆けてくる。

「おーい！ 怪我人が無理すんじゃないやねえよ！」

そんなグレイの声もまるで聞こえていないかのようだ。

「リユーナちゃん！ すつごく痛いんだ。手当を頼む！」

「俺も俺も！」

二人は我先にとリユーナの正面に回り込み、自分の傷を見せてき

た。

「え、えっと、うん！ わたしに任せて！」

リユーナは弾むような声で言うと、腰に下げた小物入れから治療用の道具を取り出し始める。

「アルス、ありがとう」

そんな声が聞こえたが、アルスは肩をすくめただけだった。

「……たく、あいつらめ」

剣呑な目をしたまま 그레이がアルスの方へと近づいていく。

「どうした？」

「いや、向こうの連中がさ、俺も怪我してるんだとかなんだとか騒ぎ出しゃがったから、殴りつけてきただけだよ」

「それは悪かったな」

「いや、お前は悪くないだろ。ってか、いいことしてるじゃねえか」

楽しそうに治療を始めたリユーナに視線を向けた後、 그레이は先ほどまでの物騒な顔から一転して、人懐こい笑みを見せる。

「さて——これからだが、どうするアルス？」

「どうする、とは？」

「決まってるんだろ。いつまでもここにいちゃあ、誰が来るかわかりやしないぜ？　こんだけ騒ぎ立てたんだからな」

「ああ、無論早く立ち去った方がいいだろうが……」

「だから、宿はどうすんだ？　俺なら麓に夜でも開いてる宿屋を知ってるんだが、一緒に来るか？」

アルスは、なんと答えるべきか迷ってしまった。偶然の成り行きとはいえ、ともに戦った相手ではある。しかし、彼は反帝国組織のリーダーであり、本来なら敵対する相手のはずなのだ。

——と、そこまで考えてアルスは自嘲気味に苦笑した。いまだに帝国の騎士気取りでものを考えるとはおこがましい限りだ。自分は騎士団を追放された人間なのだ。

「別にお前とリユーナの宿代ぐらい、どうってことねえぜ？」

人なつつこい口調で言われたその台詞がとどめだった。

グレイによれば『赤の狼』とは元を辿れば、とある国の騎士団が母体であったのだという。それも——二十年近く前に帝国に滅ぼされた国の。

なるほど、それなら彼らの剣術が比較的正統派のものであったことも頷ける。団員の中でも中年以上の者は元騎士団員が多く、若い者も彼らの手ほどきを受けているとあってはなおさらである。

かつては祖国復興のために帝国に対して反抗し続けていた彼らで

あつたが、罪のない民衆が帝国によって引き起こされた度重なる戦乱のために疲弊し、領主貴族らによって搾取されている実態を見るにつけ、その考えは大きく変わった。

特にグレイの前の団長、つまり母体となった騎士団の元団長が民衆救済のためにこそ帝国を打倒すべきなのだという理念を掲げてからは、入団希望者が増加し、元騎士団員以外の団員たちを含めて総勢二千を超えるほどの規模にまで膨らんだという。

当然、皇帝がこの動きを見過ごすはずもなく、帝国軍とは幾度となくぶつかり合ったということだが、如何せん戦力に差がありすぎた。結果、『赤の狼』は帝国各地に散り散りになってしまい、今では、各地の組織が互いに連絡を取り合いながら活動をしているといった状況にあるという。

「それにしても、皇帝のやり方ってのはひどいもんだぜ。帝国内の盗賊行為は全部俺たちの仕業にしちまうんだからな。なんで『赤の狼』ばかりが目の敵にされなきゃいけないんだか」

「かつて、それだけの規模の組織だったというなら当然だろう。国内の不安要素を徹底して排除するのは統治者にとっての鉄則だ」

アルスのこの言葉に、グレイは軽く目を細めた。

「『鉄則』ね。俺に言わせりゃ、国民を苦しめないうってことの方がよっぽど鉄則だと思うけどな。戦争に明け暮れて民衆のことを顧みない奴が統治者とは笑わせてくれるぜ」

反帝国組織のリーダーらしく、皇帝を評する言葉にとげがある。とはいえ、普段愛嬌たっぷりこの男がこんな表情になるとは、余

程の恨みがあるのだろうか。

「仕方あるまい。帝国によってこの大陸東部が統一されれば、戦争そのものがなくなるんだ。陛下も心苦しく思われているところだろう」

「へえ、随分皇帝の肩を持つんだな。……やっぱり、元帝国騎士だからか？」

「……」

「いや、別に責めてるわけじゃねえぜ。あんたの剣捌きを見て、ちよつと確かめてみたくなっただけだからよ」

グレイはきまりが悪そうに頭を掻いた。自分が引っかけるとような物言いをしたことを恥じているようである。アルスはそんなグレイの様子を見て、軽く苦笑した。

頭は切れるようだが、致命的に人が良すぎる。ただ、リーダーとして人を束ねていくには、むしろこうした男の方が向いているのかもしれない。

グレイは、黙ったままのアルスに対して、さらに言葉を続けた。

「お前が元帝国騎士だからって、どうしようってつもりはない。団員にもそういう過去を持つ奴は多いからな。だから、そんなに警戒すんなって」

ここまで言われて、さすがにこれ以上沈黙し続けるのも気の毒になったアルスは、ようやく口をきいてやった。

「……元騎士見習いだ。そんなことより、他にもっと気をつけるべき点はあるはずだぞ?」

「へ?」

「帝国式の剣術を使う人間に、素性も確かめなくて組織のことをべらべら喋るのはどうかと思う。俺が帝国側の人間だったらどうするつもりなんだ?」

アルスが言った途端、 그레이は奇妙な顔をした。

秀麗なはずの顔つきがひどく歪んだかとおもうと、辛抱たまらずといったように吹き出し、腹を抱えて笑い始めたのだ。その間にもアルスの肩をばんばんと何度もたたく。

「いやあ、まいった、まいった。そういやそうだったな。でもまあ、お前は俺のことを帝国に売り渡すような奴じゃないからな」

目のにじんだ涙を拭っている 그레이を見やりつつ、アルスは内心ため息をついた。

この三年間というものの様々な人間に出会ってきたが、こんなに変わった男は初めてだ。なるべく人を寄せ付けまいとしてきたというのに、この男といるといつの間にかそのペースに巻き込まれてしまっている。

ひとつ確かなことは、この男を嫌いになることだけはできそうにないということだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6913z/>

ヴァレンシア戦記～呪縛の螺旋・運命の剣～

2012年1月1日22時52分発行